



『Mother いのちが生まれる』

評者・佐藤 秀平 青森県立中央病院 総合周産期母子医療センター センター長

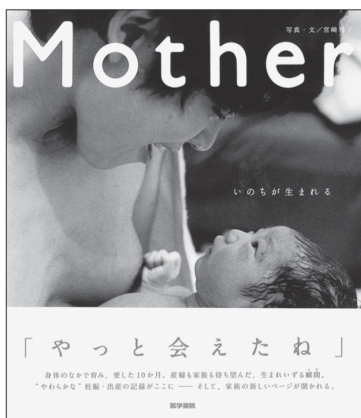
いのちの写真家・宮崎雅子
さんの写真集『Mother』

を読み終えて、私は、妊娠中の方や出産をされる方々に、このうえもない道標になるであろうと直感した。妊娠や出産の写真集は、これまでも何冊か観て読んできた。しかし『Mother』は、それらの写真集とはまったく異質なものである。多くの写真集は、写真家の個性による産物で、写実性と芸術性の表現のバランスによって、その主体となる被写体を物理的に映し出す。しかし本書は、それだけではなく、母になる女性が自然に獲得した、動物的な母性のエネルギーそのものを映し出し得た最初の写真集なのである。

本書が、カタイ「医学書業界」のなかでもわが国最前線の医学書院から発刊されたことも大きな意義がある。これは立派な医学書でもある。

医学の世界では今エビデンスという言葉があらゆるところに埋め尽くされている。お産の世界でも、安全性のためには「物理的・生物学的」な安全性が大切であると産婦人科医師は口にする。しかし、妊娠や出産というのは100人100通りというくらい多種多様な医学現象であり、現代のEvidence Based Medicine(EBM)では到底対応できないことをよく経験する。その多様性を理解していくにつれ、物理的安全性をEBMによって権威づけられる以前に、母子の愛着や家族の絆を含めた心理的・社会的あるいは動物的・感情的な安全性がなければ、真の

本書で初めて映し出された
母性のエネルギー



宮崎 雅子 写真・文

定価 2,730 円(本体 2,600 円+税 5%)

A 4 判変形/医学書院/2011 年

意味で、いのちを産み、いのちが生まれる「場」の安全性は成り立たないのだ、ということが自ずとよくわかってくる。

私自身は男性医師で、しかも「医師や頭」と言われるガチガチの科学頭人間であるが、母性の医療はナラティブな語りを通しての理解も伴って、母子のいのちの安全性が担保されるのであれば、この立場と年齢になってようやく気がついた。女性であれば、直感的あるいは体験的に感じる事ができる真実の科学を、本書『Mother』は見事に表現し実証している。Nar-

rative Based Medicine を観察し、視覚的表現として具現化された立派な医学書なのである。

本書を観て、そして宮崎さんのエッセイを読むことによって、妊婦さんだけではなく、ご家族、そして、これから母になろうとする世代の女性や、お産に立ち会う医療スタッフが、それぞれの立場で母性のエネルギーを感じ、そして出産のイメージを浮かべ、自らの体験に直に結びつけることができるようになるであろう。

最後に、1冊の本となって私が気がついたこと。普段は自分を主張せず、温和しくお産に寄り添い撮影している宮崎雅子さん自身、実は母性を最も理解している医療者であり、母性という作品を世に産み出した Mother その人であったのである。

皆さんが探し求めてきた回答を見つけた満足感を与えてくれる、この本書をお薦めします。